

ナベリウス封印美術館の蒐集士^{コレクター}

The Collectors of Naberius Sealed Museum

Naberus, alias Cerborus, Marchio est fortis, forma corvi se ostentans:
Si quando loquitur, raucam edit vocem. Reddit & hominem amabilem
& artium intelligentem, cum primis in Rhetoricis eximium.

Prelaturarum & dignitatum jacturam parit. Novendecim legiones hunc audiunt.

手島史詞 イラスト 一色



親愛なる妹へ

The Collectors of
Netherius
Sealed Museum

壮健そうけんだろうか、いまのお前にそういうのは不粹ふすいかもしれないが、元気であるだろうか。

健康という意味では、兄は変わりない。ひとまず職を得て食うにも困っていない。

兄はいま、ナベリウスという名の美術館にいる。お前をそんな身体からだにしたアーティファクトを展示する不可解な場所だ。

どうやって集めたのか、実に数百点以上もが収められている。

あんな恐ろしいものが数百以上だ。

ここに並んでいる美術品が全てアーティファクトと考えると、胸くその悪さと気味の悪さで吐き気がしてくる。

未だいまに館長とやらには一度もお目にかかったことがないし、その代理も自分を「吸血鬼」と称するおかしなやつだ。

そして、もうひとり。

こいつが特に厄介やっかいで、ひと言で表すなら傲慢ごうまん、自分勝手、厚顔無恥こうがんむち、唯我独尊ゆいがどくそん、常に人の神経を逆撫さでするような言動を取るわ、人の手紙を勝手に読むわ、兄を木偶でくかなにかと勘違いをしているわ、おまけに勝手に人を膝枕ひざまくらにすることまである始末だ。

そしてなにより許せないのは、この女が魔術師であるということだ。

アーティファクトなどというものを生み出した、あの魔術師だ。

実に鼻持ちならない忌むべき相手ではあるが——同時にこの兄やお前以上に、根深い呪いを受けた人間でもある。

あんな身体になつてなお、あいつはアーティファクトを「破壊」ではなく「保護」したいのだという。

まったくもって理解できない思考の持ち主だが、しかし信の置けない人間ではないと思う。

兄はそんな女とアーティファクトを回収することになった。

もちろん全てに納得したわけではない。

だが、ここにいればあのアーティファクトの手がかりが掴めるかもしれない。

ゆえに兄はしばらくここに留まることにした。

兄の心配はするな。早く仇を見つ^{かたき}け、お前が待つ故郷に帰る。

ナベリウス封印美術館より愛を込めて　ヴォルフ・シュヴァーレン

天使の揺り籠

The Collectors of
Nobertus
Sculpted Museum

「……『天使の揺り籠』……ねえ」

とある豪華な応接室に、ひとりの青年の姿があった。

いかにも胡散臭そうにそう言ったのは紅い髪の青年ヴォルフだ。

ワインのような紅。金髪ないし銀髪が大半を占めるこの地方では珍しい部類の髪の色だ。

鋭い眼差しは月を思わせる金色。その右目を断ち割るように縦一筋の裂傷。細身ながらも引き締

まった体軀をしており、腰には東洋の剣を差している。服装も軍人を思わせる制服で、およそ堅気

の人間には見えない。

そんな容姿なのに、腕には古びたりボンが巻き付けられていた。

今年で二十歳になる彼は、信じがたいことに美術館の蒐集士——美術品回収を主とする職員だ

った。足元には三つ首の番犬の紋章が刻まれた手鞆が置かれている。

ヴォルフは応接室の中をグルリと見回す。

ガラス張りの本棚にはびっしりと本が収められており、この主が知識欲の高い人間であること

がうかがえるが、背表紙には『錬金術師の奥義』『不死への渴望』『魔術師はどこへ消えたのか?』

『神秘への扉』などと不安なタイトルが刻まれている。

壁やテーブルにも得^え体の知れない調度品がいくつも並んでいて、あまり趣味がよいとはいえなかった。

そこにきて、この『天使の揺り籠』の名だ。

ヴォルフが疑いたくなるのも無理はないだろう。

ボサボサの髪をかき上げてため息を漏らすと、ケラケラとおかしそうな笑い声が響く。

「ええ。とある魔術師が天使を捕獲するために製作したアーティファクトらしいですよ」

間延びしたしゃべり方のそれは、若い娘の声だった。

だが、応接室にいるのはヴォルフひとりだ。同じ部屋の中に声の主^{ぬし}を見つけることはできない。

それでもかまわず、ヴォルフは言葉を続けた。

「天使なんて本当にいるのか？」

「さあ？ わたしは見たことないのでなんとも。でも悪魔や吸血鬼がいるんですから別に天使がいなくてもいいんじゃないですかあ？」

「仮にいたとして、捕まえてどうするんだ？」

「そりゃあ、天使なんだからすごい力を持つてたりするんじゃないんですかあ？ こう、神の奇跡的ななにかを起こせるとか、禁忌^{きんき}の知識を与えてもらえとか」

そこで言葉を区切ると、声の主は躊躇^{ためら}うようにそれを言った。

「……あとは、そんな天使の力を転用した兵器とか？」

ヴォルフは肩をすくめる。

「おぞましいものを作るもんだな」

「でも、ヴォルフさんの嫌いなアーティファクトってそういうものじゃないんですか？　というか、ヴォルフさんはどんなのだと思ってるんですか？」

「……普通に、鑑賞したりするという選択肢もあるんじゃないか？」

「意外と平和的です！」

心底意外そうな声が返ってきて、ヴォルフは髪をかきむしる。

「まあ、どうでもいいだろう。俺たちの仕事は回収だ。それがどんなものかは関係ない」

ヴォルフは興味がなさそうに相づちを打った。

声の主もその話題を続けるつもりはないらしく、話に戻る。

「話を元に戻しますが、形状としては鳥籠みたいなものらしいですねえ。イシュトリア館長代理さんの話じゃ、けっこう大きいみたいです。それこそ人間がすっぽり入っちゃいそうなくらい？」

ふむ、とヴォルフは頷く。

「本物だと思うか？」

「実物を見てみないことにはなんとも。でも、ここになにかしらのアーティファクトがあるのは事

実だと思えますよお」

「……場所は、特定できないのか？」

「無茶言わないでくださいよお。わたしだってなんか空気が淀_{よど}んでるなあとかやばそうだなあとかそんな感じにしか〴〵視_みえ〴〵ないんですから」

「まあ、モノがここにあるならそれでいいさ」

素_そ気_けない答えだが、その声からは不思議と信頼のようなものが感じられた。

彼女が言うには、アーティファクトがあると大気の魔力という成分に異変が生じるものらしい。そして、彼女はそれを〴〵視_みる〴〵ことができるのだ。

声の主はまたしてもおかしそうな笑い声を漏らす。

「あらあ、ダメですよヴォルフさん？　いくらわたし为天使みたいな美少女だからって、危ない鳥籠に閉じ込めてあんなことやこんなことをしたいだなんて妄想_{もうそう}を膨_{ふく}らませちゃあ」

相変わらず姿は見えないが、自分の肩を抱き身をくねらせて笑うのが目に浮かぶ声音だった。しかしヴォルフの方も慣れたものだ。

「ああ。それはいいな。そのままお前ごと封印してしまえば、少しは静かになるだろう」

「……あはー、こんな美少女をつかまえてそういうこと言っちゃいます？」

「そういうことを自分でいう女に魅力を感じると思うか？」

「あー、あー、そういうこと言っちゃうならもう知りませんからね。大事な商談の最中にポルターガイスト現象起こしたり怪しい声を響かせたり怪奇現象起こしてやるんですから！」

ヴォルフは心底面倒くさそうにため息を漏らした。

「ジブリル、幽霊のお前は、ものに触れることも人に声を聞かせることもできないだろう」

幽霊——それが、声の正体だ。

しかし声——ジブリルは負けじと言い募る。

「残念でしたあ。幽霊だけど幽霊じゃありません。わたし、ただ単に誰の目にも見えないし声も聞こえないしにおいもしないしものにも触れないってだけで生きてますう。息だってしてますしお腹も減りますう。でもあれれ？　なんででしょう。言ってる涙がでてきました」

「……あー、まあ、悪かった」

「なんですかその憐れんだ顔は！　もう頭にきました！」

ならどうしろというのかと、ヴォルフはため息を漏らす。

「もういいです。ものに触れないからって嫌がらせできないわけじゃないんですからね。商談中にパンツとか脱いで放り込んでやります。言っときますけど、わたしの身体から離れたものなら普通の人も見えるんですからね！　そしたらもう悲惨ですよ？　ヴォルフさんなんて下着泥棒の破廉恥漢ですよ？　恐れ戦いて許しを乞うといいんです！」

「……お前、その一部始終が俺には視えるんだって忘れてないか？」

「え……？」



誰にも見えないはずの少女だが、ヴォルフにだけはジブリルの姿が視認できていた。

ヴォルフの前には、腰に手を当て、たいそうご立腹な様子の少女が仁王立ちしている。

彼女がジブリルだ。

透けるような銀色の髪。下ろせば腰どころか膝まで届くような長い髪だ。それを深紅のリボンで束ね、背中に流している。整った鼻梁に控えめな桃色の唇。瞳の色はなんとも不思議な堇色だった。

ヴォルフと同じような軍服調の、こちらはワンピースに身を包んでいる。どちらの制服も襟を飾る格子模様が特徴的である。裾はシルクのフリルで飾られ、手には絹の手袋をしていた。華奢な肢体は儚くさえあり、美しい少女ではあった。

……口を開くと、その言動で台無しにしてしまうのだが。

——とはいえ、俺以外には本当に誰も視えてないからな……。

だから人前で……その、下着を脱ぐなどという突拍子もない言動が出てくるのだろう。

そんなジブリルは、カアツと頬を赤く染めてスカートを押さえた。

「……ヴォルフさん、えっちなです」

「自分で言い出しておいてなにを言ってるんだ？」

呆れた声を返して、腰に差した小刀——『吼犬』に手を乗せる。

ヴォルフがこの少女を視認できるのは、この刀の力だ。

この『吼犬』は鼻が利く。本来見えるはずのないものも、そのくにおいを嗅ぎ取って視覚化さ

せる。試したことはないが、これを失えばヴォルフもジブリルが見えなくなるだろう。

つまり、これもヴォルフが忌み嫌う「アーティファクト」のひとつだった。

会話が途切れたせいか、ジブリルが応接室の中を探索し始める。とはいっても、調度品を眺めたりその後ろを覗き込んで「ひいつ蜘蛛がーっ！」などと騒いでいるだけだが。

それから足を止めて「あれ？」と声を上げた。

「どうした？」

「肖像画があります。ここのご家族のですかね？」

目を向けてみると壁には一枚の肖像画が掛けられていた。大量の美術品に埋もれて、初めは気づかなかった。

ヴォルフも立ち上がり、邪魔な美術品をどかして肖像画を眺めてみる。

「子供がふたりいるようだな」

そこに描かれているのは誰かの寝室だろうか。大きなベッドを背景に、三人の男女が描かれている。

中央のベッドで身を起こしているのは幼い少女で、他のふたりよりも色白に描かれている。その左によく顔立ちの似た少年が座っており、右側には杖を手にした紳士が佇んでいる。

母親はいないのか、そこには描かれていなかった。

ヴォルフは、ふむと頷く。

「娘の方は病弱なのかな」

「不治の病に冒されて、それを治すためにアーティファクトを！　なんてありそうですね」

「冗談にならないからやめろ」

自分でも不謹慎だとは思ったのだろう。ジブリルも肩をすくめるだけで反論しなかった。

それからしげしげと肖像画を見つめ直す。

「しかしずいぶん仲のよさそうな兄妹ですね」

「というよりは父親が苦意識を持たれているんじゃないのか？」

ベッドの少女はどこか強張った笑みを浮かべているが、その手は兄らしき少年と繋ぎ合っている

一方、父親の方は険しい表情だった。

ふむふむとその姿を観察して、ジブリルは「しかし」とため息を漏らした。

「ふたりとも、お父さんに似なくてよかったですね」

家長のベルリングはでっぷりとした体形で、あまり見た目がよいとはいえなかった。

対して子供ふたりはどちらも淡い金髪で、小さな顔に大きな瞳と、人形のように整った容姿だった。

恐らく、母親似なのだろう。

それはわからなくはないのだが……。

——お前は、自重という言葉を知らんのか……。

そろそろ頭が痛くなってきたところで、ヴォルフはスツと目を細める。

外の廊下から誰かの足音が近づいてきたのだ。

——ひとりか。身長百六十から七十センチ。体重は百キロはあるか。中年の男といったところ

だな。

足音の大きさと間隔から鋭く観察し、ヴォルフは口を開く。

「ジブリル。そろそろ黙れ」

「……お仕事ですかあ？　ならさっきの失礼な発言も謝ってもらいたいもんですけどお」

「謝ったと思うんだが」

「心がこもってません！」

「悪かったすまないごめんなさい申し訳ない失礼いたしました。これでいいか？　さっさと始めるぞ」

「……はーい」

すさまじく不服そうな顔をしながら、ジブリルは頷いた。



ほどなくして、応接室の扉がノックとともに開かれる。

現れたのは、でっぷりとした初老しやうろうの紳士だった。

（マルコス・ベルリング。この屋敷の主に間違いありませんね）

小声ここえで囁くジブリルに、ヴォルフは頷く。

しかし紳士はヴォルフに目を向けるだけでジブリルには一瞥いちべつも向けない。彼にはジブリルが見え

ていないのだ。

（ほらほら、まずはこの髪の毛の薄いおじさんを敬愛してやまないって感じの笑顔で迎える！）

敬意の欠片かけらもない声音でジブリルは言う。

ヴォルフは仕方なく立ち上がると、顔の表情筋を駆使して柔和な笑みを浮かべた。

「お初にお目にかかります。ベルリング家御当主マルコス・ベルリング卿きょうでいらつしやいますね？
わたくし、ナベリウス封印美術館蒐集士コレクター、ヴォルフ・シュヴァーレンと申します」

本式の呼び方をするなら学芸員キュレーターだが、武器を持ち、災厄さいやくをばら撒く美術品を回収するというのは学芸員の職務に収まる仕事ではない。だから、ヴォルフたちは蒐集士コレクターと名乗る。

（ぷーっ、似合わないです！）

先ほどのお返しのもりなのだろう。隣で爆笑するジブリルに心の中で『うるさい』と毒づきながら、それでもヴォルフは笑顔を保つ。

マルコスはぎこちない笑顔を浮かべて右手を差し出す。

「封印美術館……。本当に、存在したのか。遠路はるばるようこそおいでくださいました、シュヴァーレン殿」

握手を交わしながら、ヴォルフは違和感を抱いた。

ベルリングは落ち着かないように宙へ視線をさまよわせていて、手を握るのも形だけという具合にすぐ離す。

——これは嫌悪……。いや、敵意か？

にこやかな笑みとは裏腹に、肌がひりつくような感覚があった。常人なら感じることもないだろうささやかなものだが、友好的に思われていないと感じた。

それに気づいているのかいないのか、ジブリルは囁きを続ける。

（まずは相手を褒めちぎってください。調度品の趣味がいいとか博識そうとか、なんかそんな感じで適当に！）

適当じゃ駄目だろうとため息を押し殺し、ヴォルフは笑顔を崩さぬように言う。

「美術品愛好家として名高いとお聞きしておりましたが、なるほど見事なコレクションです。ベルリング卿は目利きでいらっしゃる」

顔の傷さえなければ、誰が聞いても気分がよくなるような完璧な世辞だった。

ジブリルでさえ、呆氣に取られるほどだったのだが……。

「……ふん。なにが目利きなものか。こんなもの、ただのガラクタだ」
ベルリングは目に見えて憤慨していた。

（ちよっとちよっと、このおじさん、なんか怒ってません？ 大丈夫です？ わたし、やつぱり下着でも投げ込みましょうか？ さすがに下はキツイですけど上ならギリギリなんとか。きっと空気と和みますよ？）

むしろこの上なく殺伐とした空気になると思うのだが……。

——こいつ、本当は俺を陥れただけなんじゃないか？

頼むから黙っててくれと、ヴォルフは頭を抱えたくなった。

気を取り直してコホンと咳払いをして、もう一度笑顔を作り直す。

「気分を害されたのでしたらお詫びいたします。ですがここに並ぶものは明確な価値を持った美術品です。ガラクタとおっしゃられるのはあまりにもつたないかと」

「ただの美術品など集めたところでなんの意味もない」

そのひと言に、ヴォルフは目を細める。

——不治の病に冒されて、それを治すためにアーティファクトを！ なんて——

さっきのジブリルの冗談だが、冗談ではなくなってきたようだ。

ベルリングは落ち着かないように部屋の中を歩き始める。ヴォルフは立ったままそれを目で追った。

ジブリルが少し慎重な声で語りかける。

（ちよつとアプローチを変えた方がよさそうですね。先にお金見せてあげましょう）

もともと、ヴォルフたちはアーティファクトを買い取るためにここに來たのだ。

ヴォルフはベルリングに気取られない程度に頷くと、足元の鞆をテーブルの上に置いた。

「どうやら、私は外交が不得手のようです。本題に入られますか？」

言いながら、鞆の留め具を外す。

そつと蓋を開くと中には筒状に束ねられた金貨が積まれていた。五十枚ごとに紙片でまとめてあり、それが二十本——つまり一千枚の金貨がここに納められていた。

ヴォルフは心の中で悪態をつく。

——くそ、どうりで重たいと思った。

金貨は一枚で三十グラムほどの重さだ。それが一千枚なのでこの小さな鞆ひとつで三十キログラム以上もあることになる。小さな屋敷なら土地ごと買えるような金額だった。

鞆の中身が金貨だとは聞いていたが、この量は想像していなかった。

そんな金貨の山を見ても、ベルリングは眉ひとつ動かさなかった。

ジブリルが額を押さえて呻く。

（あう、お金持ちにお金を見せても効果ないじゃないですかあ）

——お前がやれと言ったんだろが。

堪えきれず、ヴォルフは表情を険しくした。ベルリングがいなければ拳骨を下ろしていたかもしれない。

ベルリングは金貨を意にも留めずに問いかけてくる。

「それより、君の組織はなんと言ったかな。ナベリウス……？」

「ナベリウス封印美術館——ある『特殊な美術品』を専門的に扱う美術館でございます」

「そう、ナベリウスだったな」

ベルリングは何度も頷いてその名前を繰り返す。

「つまり、貴君の美術館には『例の美術品』がいくつも収蔵されているわけか？」

「そう思っていたいて問題はありません」

「ほう。実に興味深い。たとえば、どういった代物があるのかね？」

踵を鳴らしてヴォルフに向き直ると、ベルリングは爛々と目を輝かせて問いかける。

ジブリルが洪面を浮かべた。

（あー……。この反応はよくないですね。ヴォルフさん、適当にはぐらかしてもらえますか？）

わかつている、と視線を返してヴォルフは笑顔を浮かべる。

「当館に収められれば、どんな美術品もただの美術品でございます。特筆して申し上げるようなことはございません。無論、その美しさはなんら損なわれるものではございませんが」

言葉を並べただけでなにも答えていない答に、ベルリングの顔がカッと赤くなる。

「それでよく美術館を名乗れるものだな！」

「はい。当館は危険極まりないアーティファクトを恒久的に封印するための美術館でございます。

閲覧は、ただの副産物でございます」

自然と威圧的になってしまふヴォルフの眼光に、ベルリングは戦いて後退る。

それでも初老の紳士は果敢に言い返した。

「だが、それはアーティファクトの独占ではないのか？ あれで美術館を開けるほどの数を揃えているというなら、貴君らは世界でさえ思うがままに動かせるはずだ」

「——ベルリング卿」

苛立ちを込めて、ヴォルフははっきりとこう告げた。

「アーティファクトに関わった者は例外なく破滅します。例外なく、です。わたくしや当館の

蒐集士^{コレクター}も含めて例外はございません。あれは、そういったものなのです」

いくつも集めなくとも、ひとつが暴走するだけで街、あるいは国、もっとひどければ世界を滅ぼしかねない。呪い^{クセ}が封じ込められているのだ。

だから暴走を始める前に封印しなければならぬ。

ヴォルフもジブリルも、それを誰よりも理解しているから封印美術館にいる。

冷たくベルリングを見据えて、ヴォルフは言う。

「間違っても使うなどという考えを持つな。手に入れただけのお前はまだ救われる可能性がある。

アーティファクトなんてものは存在しなかったのだと、全てを忘れろ」

隣で、ジブリルが頭を抱えた。

(……ああもう。それじゃケンカ売ってるだけですよお)

しかし口で言うほど、その言葉に非難の意志は感じられなかった。彼女もヴォルフの言葉が間違っているとは思っていないのだ。

ベルリングは怯えた^{おび}ように後退り、背後の本棚にぶつかる。

「ひっ、そ、それで私のアーティファクトも奪いに来たというわけか！」

「それは誤解です。ベルリング卿。わたくしどもの目的はただの封印です。わたくし個人の感情としては、むしろこの場でたたき壊したいくらいですから」

できるだけ紳士的な口調を意識して言いなだめるが、ときすでに遅しだった。

ガタツと身をすくめて、ベルリングは出口へと逃げていく。

「や、やはりアレは貴様らには渡さんぞ！」

捨て台詞ぜりふのようにそう言っていると、ベルリングは出ていってしまう。

あとには、仏頂面ぶつちようづらのヴォルフとポカンとしたジブリルだけが取り残された。



主の逃げ出した応接室で、ジブリルが途方に暮れたようにつぶや呟く。

「えー……。ちよっとこれ、どうするんですか。いまの、交渉決裂どころか強盗みたいに思われますよ？」

「知らん。俺は事実を口にしただけだ」

「あなたのアーティファクトを壊してやりたいとかただの暴漢じゃないですか、なに考えてるんですか！」

「うっ……」

そこを指摘されると反論できなかった。ついカッとなって言ってしまったのだ。

ヴォルフが縮こまると、ジブリルはなんでもなさそうに肩をすくめる。

「ま、実際ヴォルフさんがどう言ったとしてもご破算になってたと思いますけどね」

「……どういう意味だ？」

怪訝^{けげん}な顔をするヴォルフに、ジブリルはテーブルを示す。

「まず三〇分以上待たされているのに飲み物も出されない。よほど社交能力の低い人間でないなら、失礼だくらいには思いますよ。挨拶^{あいさつ}してから自分も座ろうともしなかった。歓迎していない相手と同じ席に座りたくないという心理の表れだと思います。お金にも興味を示しませんでしたし、極めつけはヴォルフさんがぼーっと突っ立っているにも関わらず座れとも言わないとこですね。意地悪でやってるんじゃないければ普通は気にしますよ」

握手のときに抱いた違和感は、どうやら正しかったらしい。

「よく観察してるものだな」

「ふふん。見直しました？ わたしはただ可愛^{かわい}いだけでなく頭だっていいんですから！」

「あーはいはい」

投げやりな反応に、ジブリルがぶくつと頬を膨らませる。

「ヴォルフさん、やっぱりわたしのことおバカだと思ってるでしょう」

「そこまでは言っていないが」

「やっぱり変な子だとは思ってるってことじゃないですか！」

「それはそうだろう」

他にどう思えいいのか、ヴォルフは心外そうに答えた。

ジブリルはブイッと顔を背けるが、仕事を忘れたわけではないのだろう。すぐに眉をひそめると唇に人差し指を当て、怪訝そうに呟いた。

「でも、おかしいですよ。だって――」

「――アーティファクトを封印してくれって頼んできたのは、ベルリングさんなのに」

「ナベリウス封印美術館の蒐集土^{コレクタ}」 試読版第一弾はここまで。

試読版第二弾も近日中に公開の予定です。乞うご期待!!

GAノベル初のミステリアス伝奇「ナベリウス封印美術館の蒐集土^{コレクタ}」は2017年1月15日発売予定です。